



総合ケアサービス  
株式会社 創心會

2009・Spring

創刊号

# The Journal of True Care

## ● Index ●

P01

● 社員の皆様へ | 代表取締役: 二神 雅一

P02

● リハビリコラム「日々のリハビリを通して」

■ コラム① 肺炎予防: 小谷 英二

■ コラム② ターミナル期のリハビリを通して学んだこと: 笹川 和彦・井上 直樹

P03

■ スキルアップの為の個人の取り組み | 「正臣会の活動を通して」

■ 歓びの道 | 「私の感動体験」① 榎原 好美 ② 大橋 真由美 ③ 山田 浩貴

■ きらり輝いている人 | 東備センター 祇園 紀一

P04

■ グループホームの取り組み | 「心から撫川」の紹介

P05

■ キラリ祭を通して学んだこと | 横田 智久

● 掲示板 | スノーボード同好会・西大寺会陽はだか祭り

● お知らせ・編集後記

P06

P07

● パソコンスキルアップ講座 | 松本 賢治

● 本物ケア学会開催ご案内

株式会社創心會 機関誌  
春号

Vol.001

介護業界はコムスンショックや、経済財政諮問会議によってかけられた呪い（社会保障の削減）などで、とことん疲弊してしまつたように感じられます。こうしたマイナスイメージは全国各地に蔓延し、現場では労働条件の先行き不安を訴えての離職が多発、その結果生じた人員不足は更なる労働環境の悪化を招きます。介護系専門学校の入学生員割れ、卒業後の進路を福祉から一般企業に

## プロとして共に学び合う機会を創造し、互いの知識や技能を高め合う風土創りにこのジャーナルを活用してください。



代表取締役 二神 雅一

シフトチェンジする学生の続出、こうした悪循環が深刻化しています。また、事業運営側に対しても定着率の向上に資する取組みに疑問の声が向けられ、努力不足を指摘されているところでもあります。

この状況下で、次期介護報酬改定の内容が次第に明らかになってきました。この報酬改定に当たっての「社会保障審議会」や、2015年に向けた「安心と希望の介護ビジョン」等では、介護従事者の処遇改善や労働環境のあり方、更にはキャリアアップについても盛んに議論されました。このようなことを受けて、改定の基本的な視点のひとつに介護従事者の人材確保・処遇改善が挙げられました。具体的には介護従事者の専門性等のキャリアアップに着目した評価が示され3年以上の勤務年数や専門資格の配置などによって加算する仕組みが設

けられるようになるようです。介護業界の人は、介護報酬で専門職化と勤務年数にインセンティブを設けるという意味を深く考えその意味をもっとも認識する必要があります。さて、創心會は介護保険が創設される前から存在している会社であり、たとえ制度が変わったとしても、存在意義がなくなってしまう、目指すべき方向性が変わってしまう、たりするようないことはありません。しかし、制度改正は事業運営に多大な影響を及ぼすことも事実です。先の改定では訪問リハの事業継続の危機に繋がるような通達が出され、そのリスクを回避するために事業計画の見直しを余儀なくされてしまった。こうした経験からも、改定の流れを汲み取った対応策をとることも必要です。私が常に考えていることは、創心會としての存在意識や理念をしっかりと土台に持ち、正確に将来を予測し、安定的な事業運営を目指すということです。今回の改訂ではキャリアアップに関することも提言されており、



こうした部分に関しては大賛成です。これまでも創業者として、現場における専門性の向上は大きな課題だと感じていました。我々の使命はリハビリテーション理論をベースとした包括的本物ケアを普及し、ケアイノベーションを起こすことです。一人ひとり、ケアイノベーターとなるべく、本物ケアや創心流地域リハケアについてのプロ

と呼ばれるにふさわしい知識・技術を身につけていただきたいと考えています。そのためにも共に学びあう機会の創造が必要だと痛感しているのです。

このジャーナルの発行はそうした専門職としての認識を高め、知識や技術を高め合う機会の提供、そうした風土を創ることを目的とするものです。多くの方が主体的にこのジャーナルに参加され、我々のサービスの根幹である専門技術の向上を図っていただきたく思います。そして、こうした活動が更なる欲働環境、魅力ある職場創りに繋がっていただくとを願います。

Rehabilitation Column



【リハビリコラム】

「日々のリハビリを通じて」

① 肺炎予防  
訪問看護ステーション 言語聴覚士 小谷英二  
② ターミナル期のリハビリを通して学んだこと  
訪問看護ステーション 作業療法士 笹川和彦・井上直樹



① 「肺炎予防」

訪問看護ステーション

言語聴覚士

小谷英二

K・Tさん 79歳 男性  
要支援2  
喘息 糖尿病 うつ病

これまで誤嚥性肺炎を半年に一回以上起こして入院を繰り返すというので、肺炎を予防する目的で去年の夏から、週一で訪問リハビリの開始となりました。初めての訪問の時、言語リハビリではどんなことをするのだから？・・・と興味津々で様子伺う奥様の姿がありました。K・Tさんは加齢に伴う嚥下機能の低下がみられますが、摂食嚥下機能自体では問題のない状態でした。もしかすると誤嚥をしてもその時に明らかな症候が出現しない不顕性誤嚥（ふけんせいごえん）が主な肺炎の原因ではないだろうかということが判りました。つまり食物が胃酸とともに逆流した細菌の感染症肺炎に移行することである。



これを予防するためには、胃・食道内圧の上昇を抑えて逆流を防ぐことである。その危険因子としては①喫煙②カフェインなどの喫食③早食④食後の不良姿勢⑤食後すぐの臥床。Kさんの生活習慣をよくよく調べてみると、これらすべてに該当していることがわかりました。まずは、環境調整をして全身の健康管理に努めてもらうと、説明と指導の内容をプリントして理解してもらおうことから始めていきました。毎日の喫煙本数をチェックシートに書いてみる（記録ダイエットにちなみ）毎日10杯飲んでいるコーヒーとコーラ類の飲食を控えてもらう。食事指導としては、戦争経験者であるK・Tさんは、早食いの達人で、食事時間は十分くらいですが、ゆっくりよく噛んでから飲み込む。食後二時間は畳の上で横にならずに座椅子に座ることを実行してもらいました。現在は奥様の協力もあり、毎日喫煙本数を記録してもらっています。折れ線グラフで見ても、煙草の本数は一本ずつでも減らすことができました。また、夫婦で互いの身体を労わりながら一緒にストレッチをしてもらい元気に過ごされています。

② 「ターミナル期のリハビリを通して学んだこと」

訪問看護ステーション

作業療法士 笹川和彦  
作業療法士 井上直樹

今回、訪問看護（リハビリ）でターミナル（終末期）のご利用者様（以下T氏）を担当させていただきました。T氏は左乳癌、多発性脳転移、髄内播腫など様々な病気を抱え、薬物投与するも、症状改善されず、次第に食欲もなくなっていく、月単位の余命であることを宣告されました。ご家族は「体力を回復させ苦痛を取り除きたい、本人が望む普通の事をしたい、本人は「入浴したい、リハビリしたい」と希望され、入院の勧めはありませんでしたが、地域で支援体制を整え、自宅で看取ることとなりました。リハビリ内容としては関節が固くならないような運動・起き上がり訓練・立ち上がり訓練・座位保持訓練・移乗訓練を中心に行っていました。また、T氏と関わる上での我々リハビリスタッフの心構えとして、①いかに、T氏のお顔を引き出せるか、ご家族と笑顔で過ごせるか。②T氏がどのような人生を歩んでこられたかを聴き、その生き方をT氏・ご家族と一緒に確認し、認めていく作業を行う。の2点を常に意識して関わりました。①に関しては、季節が秋だったので、キンモクセイやコスモスの花を、香りが分散しないようにタッパーに詰めて持参し、香りを嗅いでいた

き五感に訴えることや、化粧を勧めることをしました。またブラス発想の声掛けを常に意識して、出来た事をT氏だけではなくご家族やCMにもしっかりと伝え、皆を巻き込んでプラスのオーラで包んでいくように関わっていました。サービス開始から約一ヶ月で宣告通り、T氏は他界されました。葬儀に参加させていただいた際に、T氏の長女様より感謝の言葉をいただきました。その中でも特に花、化粧の事に対して「母も喜んでいたらと思います」と涙を流されていました。サービス提供時には、T氏の心に寄り添った本物ケアとは何なのか。本当に今の関わりが良いのか。本当にかが分らずに、とても不安でした。しかし、ご長女様からいただいた言葉で「関わり方は間違っていないかったんだ」ということを実感する事ができました。これからも本物ケアが提供できるかを常に確認しながらサービス提供に努めていきます。



## Rehabilitation Column



### スキルアップのための個人の取り組み 「正臣会の活動を通じて」 訪問看護ステーション 作業療法士 村井正臣・波多野恵信 「私の感動体験」 訪問看護ステーション 作業療法士 大橋真由美 榎原好美 山田浩貴

- ① 笹沖 Jr.
- ② 本部センター 作業療法士 榎原好美
- ③ 笠岡センター センター長 山田浩貴



#### 「正臣会の活動を通じて」

訪問看護ステーション

作業療法士 村井正臣  
作業療法士 波多野恵信

故郷山口をあとにして、私が訪問リハをやりたいがために岡山にやってきたのは平成19年4月、桜の咲く頃のことです。日々の業務を行っていくうちに、自身の経験不足から、訪問リハビリテーションというとても独特な環境にあることに戸惑いを感じていました。一人で利用者様に関わり、その場でアドバイスをもらうことができない状況がほとんどで、現状のリハビリテーションは本当にその方にとって一番必要なことなのか？エビデンスをもってサービス提供ができていいのか？といった不安や疑問を持っていました。センターの中や、電話で相談をしているうちに、そういった気持ちを持っていくスタッフが一人では無いことがわかりました。「それならテーマ、時間、課題などを決めて普段持っている疑問や不安を感じていることなどを、みんなで話し合ってみよう」という解決しようがないかそのようなことがきっかけで平成20年9月18日、正臣会は当初三人でスタートしました。1月29日現在で活動は11回を数え、各々に感じることがありました。岩井「歴代首相の多く輩出した、山口県出身の村井正臣さん。彼の声掛けから始まりました。こういった機会をもてるのはとてもよいこと、是非、これからも方向性を示しながら継続してほしいと思います」波多野「正臣会で



勉強会を重ねるたびに、日々の訪問で分からないこと・疑問がどんどん出てきます。そして、確かな知識を持ち、リハビリを行っていきたく感じています。村上「まだ数回しか参加していないけど、先輩方も分からないことを分からないといってくださるので、自分も発言が出来るように知識として固まっています。ある程度経験を積んでも悩みなながら訪問されており、効果的なりハビリを行えるよう勉強されている先輩方をみて、自分ももっと成長し

たいという思いが強まりました。頻度などは二週に一回程度実施しており、基礎的な所からしっかりと取り組んでいるところです。そのためまずは分からないことは分からないと互いに言い合える環境を作ること。やるやらないは自分次第ですから、やる気のある人で会を創っていきたくと考えています。多職種の方もどんどん声をかけてください。

#### 「私の感動体験①」

笹沖 Jr.

大橋真由美

十月からご利用を開始された方についてです。初めは全てにおいて意欲の低下が強く、来所されても臥床の時間がほとんどを占めていました。慣れるまでは、週二回・11・30までのご利用を楽しんでいただくことを目標にしました。スタッフが出来るだけその方と関わりを持つと共に、その方と他のご利用者様との橋渡しにも努めた結果、ご利用を重ねるうちに徐々にデイでの雰囲気にも慣れ、フロアで過ごされる時間も長くなりました。また、冗談や笑顔が見られ、他の方との交流も以前に比べて増えてきました。さらに、一月に入ってからご本人様から昼食を食べて帰るとのご希望があり、13:00までのご利用となりました。今後は過ごす時間がさらに長くなり、その方にとって安心できる空間になるよう、支援していきたいと思えます。

#### 「私の感動体験②」

本部センター

作業療法士

榎原好美

先日、リハ部門の勉強会でターミナルケアについての発表会がありました。「自分が死ぬ前にどんなケアを受けたいか」を話し合い、約一ヶ月間ご利用者様やご家族の笑顔を引き出す関わりをされた笹川さんと井上さんに感動しました。こんな素敵なスタッフの方々と一緒に働けることに感謝しています。また、人の命は永遠ではないので、私の担当しているご利用者様に適切な関わりをしているかどうか、アンテナをもっと鋭くしていこうと思いました。

#### 「私の感動体験③」

笠岡センター

センター長

山田浩貴

あるご利用者様が発症から今日に至るまでの経緯を話してくださった。すごく印象深いのは奥様や家族のプラス発想での関わりです。今のご利用者様を受け入れ、一緒に頑張ろうとする姿勢といういろいろなことにありがどうの一言を伝えていくご利用者様に感動しました。



Rehabilitation  
Column



きらり輝いている人

東備センター 祇園紀一「取材」門田知子

グループホームの取り組み

吉備地域リハビリケアセンター「心から撫川」

「協力」浦道さとみ・山崎崇史「取材」笹川和彦



きらり輝いている人

東備センター

祇園紀一

昨年秋頃にご利用者様から頂いた渋柿の皮を送迎業務の合間に数十個むき、祇園さんお手製の軒下につるして下さいました。



また、年末には餅搗きを行う予定で、臼と杵の調達に困っていたところ、自宅の臼を改良し手作りの杵とセットにして、すぐ持ってきて下さり☆なんと！片麻痺の方や女性でも掲げられるようにとの配慮で【うさぎの杵】まで作って下さいました。細やかな心遣いにスタッフご利用者様共に大感激でした。当日は祇園さんの臼と

杵が大活躍祇園さん自身も送迎後にサービスにどっふり入って下さり、大変楽しい餅搗きを行うことが出来ました。ご利用者様の中には、片手だから、と遠慮されていた方や、片麻痺で、重い杵を掲げるか不安だった男性のご利用者様もいらっしやいました。が、小さい杵でも餅を搗くことができたり、祇園さん自身も【日頃のリハビリの成果を発揮して下さいよ！】と気持ち良く声をかけて誘って下さったおかげで、片麻痺男性利用者様も背中を押されチャレンジしてみようと心が動いた様です。思った以上にしっかりと両下肢で踏ん張って



重い杵を振り上げることが出来た！というところにご自身でびっくりされ、非常に自信に繋がったようでした。皆さん久しぶりの珍しい体験であり、障害を負った後にも餅搗きが出来た！という喜びに大変満足気な表情をされていらっしやいました。これも祇園さんの影の行動あつての事だと、祇園さんの奮闘に一同感謝の気持ちでいっぱいです。しかし、こんなことでは終わらない！祇園さんの活躍は、皆さんの喜ぶ顔を見れば見るほどエスカレーター？していきます。年末には門松をまたまた手作りを持ってきて玄関に飾って下さいました。ご利用者様も玄関を出入りされる度にお正月気分を一足お先に感じていらっしやいました。まだまだ書き切れない事は沢山ありますが、このあたりにして、祇園さんの紹介に致します。

人生の途中で思わぬ方向に入ってしまったご利用者様は本当に悔しいお気持ちで、毎日を通していただいていると思われず、送迎車内でのお話時に時々そのことが表れています。定年を迎えたときに病気に会い半身麻痺に見舞われ、これから人生を楽しみたいと思っていた矢先に…等々。



どの様な状況の人でも目標を持つて過ごしたいと願っているはず。何かに生きがいを見出し目標に向かって生きることが人生ではないかと思ひ目標実現のお役に立ちたいと思ひ試行錯誤しています。目標はこれまでの人生の中で、経験してきた生活習慣の中にあると考えました。日本人なら皆が経験した四季折々の行事や、その地方にある習慣、文化を楽しむ事にあると思ひ家庭菜園の環境作りに始まり年末年始の風習に触れられる環境作りのお手伝いをしました。今後もしもリハビリ倶楽部員で、生活感に触れられる環境作りを考えていきたいと願っています。

「グループホームの取り組み」

吉備地域リハビリケアセンター

心から撫川

協力：浦道さとみ

山崎崇史

取材：笹川和彦

今回は吉備地域リハビリケアセンターにある、グループホーム心から撫川を紹介します。グループホーム心から撫川にはリハビリユニットと生活ユニットの2ユニットがありますが、今回はリハビリユニットにスポットを当てて紹介したいと思います。ここではリハビリユニットという独自の特性を打ち出していくために、各居室の中は在宅をイメージして、あえて5cmの段差をつけ、靴やスリッパを脱いで畳の上へ上がるという環境になっております。これらの環境はご利用者様が主体的に動いていただけるようにあえ





て造られています。また全体的なユニットの造りとしてはスタッフの目が届かない死角をあえて造り、ご利用者様が人目を気にせずにご過ごせる空間を演出していました。リハビリユニットで感じたことは、センター目標として挙げている五感に訴えるセンサー創りを常に意識した取り組みを実践していることでした。具体的には日曜日にはドライプに行くことを通して、外部からの刺激を積極的に取り入れることにより、五感に訴え掛け、閉鎖的な空間を改善しようと取り組まれていたことです。また、おやつ作りなどを通して廃用による手指感覚の低下を招かないようにと、全ての活動にご利用者様に参加していただきやすいような環境を創っていたことが印象的でした。更に月に一度、地域のフワーアレンジメントの先生を招き、生け花を実施していただきました。季節毎に合った花を活け、ご自身の居室に飾っていただくこ

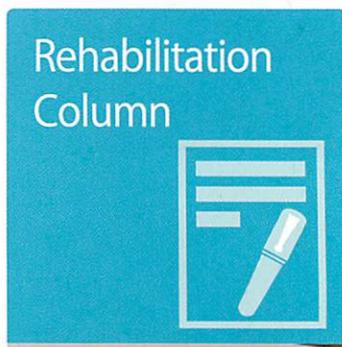


となど、常に五感に訴え掛けた関わりを意識して実践しておりました。更にご家族様をお誘いしての行事や、地域の方との意見交換の場として運営推進会議を催すなど、ご家族様や地域の方と連携を密に取っていく事も大切な業務の一つとして意識されているのを感じました。スタッフ間の連携もしっかりととれており、ユニット内は明るい雰囲気、笑顔や笑い声が絶えないユニットだという印象を受けました。

のを感じました。スタッフ間の連携もしっかりととれており、ユニット内は明るい雰囲気、笑顔や笑い声が絶えないユニットだという印象を受けました。



去年の11月21・22・24・25日の四日間、岡山センターにてキラリ祭を行いました。キラリ祭とは、ご利用者様のきらりと輝く姿をご家族の方やケアネージャーの方に見ていただいたり、地域の方との社会交流も目的とした文化祭です。主役はもちろんご利用者様で、どんなことをするかなど全てご利用者様に決めていただきながら、約三ヶ月前から準備にとりかかりました。私も、何か大学で学んだことをこのキラリ祭で生かしたいと思いました。



キラリ祭を通じて学んだこと  
東岡山センター 横田智久

大学では手話の勉強もしていたので、ご利用者様に手話で合唱をしていただくと思い提案をさせていただいたところ快くOKをいただきました。火曜日のご利用者様にさせていただくことになり、曲は「ハナミズキ」になりました。私は、内心三ヶ月という短い期間で形になるかとても不安でした。キラリ祭までに形になるようにスケジュールも組み、練習を始めました。最初は歌詞を覚えていただくことから始まり、手話の練習に入る事さえ難しく、なかなかスケジュール通りに進まなくて悩んでいました。すると他のスタッフの方も手話を覚えてくださり全面的に協力してくださいました。週に一回でしかも一時間という限られた時間の中でご利用者様がまとまり集中して練習に励んでくださいました。なかにはご自宅で練習された方もおられ、とても嬉しかったです。三ヶ月という短い時間はあっという間に過ぎてしまいました。そして本番の時がやってきました。私もとても緊張していましたが、それ以上にご利用者様も緊張されているのが空気で感じられました。



私はただ見守ることしかできなかったんですが、手話は大成功でした。手話が終わったあとには、とても感動し何も言葉がでませんでした。そこに手話を一緒に頑張らせてくださったご利用者様が「この年になって何か新しいことチャレンジするのはとても勇気がいることだし、絶対無理だと思ってた。だけどこうやって手話を始めて、成功したことで勇気が持てたよ。勇気をくれてありがとうね。」と言われたときには涙が止まりませんでした。本当に今までで一番の感動体験です。



みなさんこんにちは!!冬の季節になると活動します、スキー・スノーボードサークルです!!今年も「女鹿平」「ミズボハイランド」などに行つてきました。やっぱり最高に楽しいですね☆日頃なかなか話をする機会がないようなスタッフとも、スキー・スノーボードを通して部門を越えた交流ができることも魅力の一つではないでしょうか?これらの交流をきっかけに更に質の高いチームケアアプローチにもつながっていったらと考えております。スキー・スノーボードが大好きな方やもちろん、

## スノーボード同好会 吉備センター

笹川 和彦

## Bulletin board



### 【みんなの掲示板】

スノーボード同好会 吉備センター 笹川 和彦  
西大寺会陽はだか祭り 岡山センター 出井 利幸

### TOPICS: お知らせ・編集後記

初心者の方も大歓迎です。大人数になったらバスを1台貸し切って皆で行きましょう♪興味のある方は、訪問看護の中新か笹川まで声をかけてください。

### 西大寺会陽はだか祭り

岡山センター

出井 利幸

創心會として通算3度目の西大寺の会陽に参加しました。年々参加者は増えており、今回総勢12名となりました。チームの方針としては、宝木を目指しますが、私たちは安全を第一に考えています。特に初心者の方には、危険箇所、身の守り方などオリエンテーションをしっかり行います。その効果もあるのでしょうか。三年を通して人が一人もいません。また、参加した人達は、全員が口を揃えて「また来年も出たい」と言っています。来年は、西大寺会陽五百周年の年です。そのためには更なるチーム強化を年間計画で設定し、練習等もしていきたいと思えます。参加されたい方は是非、声を掛けてください。



機関誌編集スタッフ一同

### TOPICS

次回7月発行予定の「夏号」より毎月テーマを決め社員の皆様より原稿を募集いたします。審査の結果見事原稿が採用、掲載された方には社長より参加賞が贈呈されます。  
次号のテーマに関しては現時点未定ですが、決まり次第社員の皆様にお伝えします。皆様と少しでも心算下さい。

### お知らせ

機関誌編集部では社員皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。また日々のサービスの取り組みの中で他の人に伝えたい感動や学んだことなどいろいろなお記事を募集しています。総務部 赤澤までお気軽にお寄せ下さい。

### 編集 後記



★無事、第一号を発行することができました。今後機関誌を通して創心會のサービスがより専門性が持て、理想に近づけるお手伝いができればと思っております。

【出井】

★年末から少しずつ作成しようとして遂に完成することができました。第二号、第三号と盛り上げていきますので宜しくお願いいたします。

【波多野】

★まずは創心會の職員全員が読むのを楽しみにしてくれるようなものを目指して作成に力を注いでいきたいと思っております。楽しみながら取り組んで参ります。

【笹川】

★創心會のサービスマスターや思いが皆さんの「心」に伝わるようなものをこれからも作成していきます。「共力」して頑張っていくので、宜しくお願い致します。

【横田】

★機関誌を通して創心會のチームシナジー強化をしていきたいです。

【小倉】

★遂に第二号の発行です。皆さんにこれからの発行を楽しみにしていただけのように、楽しく勉強になる機関誌を目指して頑張ります。

【岡本】

★機関誌に携わる事を通して皆さんのお役にたてる事に大変感謝しております。ありがとうございます。

【門田】

★様々な方と関わらせて頂き、感謝と共に第一号が完成しました。私も皆さんのお役にたてるよう精一杯頑張つて参りますので宜しくお願い致します。

【赤澤】

